

白洲正子の

shinkokinshyū

新古今集

花にもの
思ふ春



白洲正子の新古今集

花にももの
思ふ春



平凡社

白洲正子の新古今集 花にももの思う春

一九八五年九月一〇日 初版第一刷発行

著者——白洲正子

発行者——下中邦彦

発行所——株式会社平凡社

東京都千代田区三番町五

郵便番号一〇二 振替・東京八二九六三九

電話(〇三)二六五—〇四五五

印刷——東洋印刷株式会社

製本——株式会社石津製本所

定価 一七〇〇円

© 白洲正子 1985 Printed in Japan

不良本のお取替えは直接読者サービス係まで
お送り下さい(送料小社負担)

ISBN4-582-37122-1

白洲正子の新古今集
花にも思う春

目次

新古今集の歌

万葉集と古今集

6

新古今和歌集の誕生

21

歌合とその周辺

36

新古今集の歌

54

枕詞と歌枕と本歌取り

68

新古今時代の歌人

後鳥羽院

94

良経

113

引用歌一覽	作者名索引	西行	家隆	賴政	式子内親王	定家	俊成
274	253	230	215	197	177	152	126

裝幀
菊地信義

新古今集の歌

万葉集と古今集

万葉集と、古今集と、新古今集は、三大和歌集と呼ばれている。そのうち万葉集は、序文を欠いているので、成立の過程がはっきりしないが、八世紀の中頃、おおとものやかもち大伴家持によって編纂されたと伝える。文字どおり、万よろずの言ことの葉を集めた歌集で、上は天皇から、東の果ての庶民の作にまで及ぶ。時代もほぼ四百年間にわたり、四千五百首以上の歌が集めてあるので、その特徴を一概にいうことはできない。素樸な歌もあれば、こまやかな情こころのこもった歌もあり、滑稽な歌もあるという工合で、代表的なものを一首えらべといわれても困るのである。

代表的かどうか私は知らないが、好きな歌なら掲げることができる。それはたとえば左のような歌である。

石^{いは}ばしる垂水^{たるみ}の上のさ蕨^{わらび}の萌えいづる春になりけるかも

(志貴皇子——卷八)

勢よく流れる滝のほとりに、蕨が萌えはじめている。春だ、春が来たのだ、——そういう感動がいきいきと伝わって来る。ただそれだけのことなのだが、いっきに謳いあげた淀みのない調べには、爽やかな水音と、しのびよる春の気配が聞えて来るように、やっとめぐって来た陽光のおとずれを、天地をあげて謳歌している感じがする。いわゆる万葉調の中でも、これほど勢がよく、しかもゆったりとして、生れ出づるいのちの美しさを讃えた歌は少いと思う。

万葉集は、五世紀の雄略天皇の御製にはじまる。それは天皇が大和の泊瀬^{はせ}朝倉の宮にいられた時、近くの岡で菜を摘んでいる少女^{おとめ}に言いよった歌で、「天皇^{すめらみこと}の御製歌^{おほみうた}」にふさわしい、明るくおおらかな調べである。

籠^こもよ み籠持ち
掘串^{ふくし}もよ み掘串持ち

この丘に 菜摘ます児 家聞かな 告らさね^の
 そらみつ 大和の国は おしなべて われこそ居れ^き
 しきなべて われこそ座せ^ま われにこそは 告らめ^の
 家をも名をも

「み籠」も、「み掘串」も、菜摘籠と土を掘る道具の美称で、それを持って菜を摘んでい^{おとめ}る少女よ、名をなの^{おとめ}つておくれ。我はこの広々とした大和の国をおさめている王者であるぞ。我だけには、家も、名も、包まず教えてほしいものだ、と問いかけた歌である。

古代の女性にとって、名をなの^{おとめ}ということは、相手に魂をゆだねることであり、だから本名を明かさないのである。それをあえて真向うからたずねたのは、いかにも王者らしい堂々とした態度で、万葉集の巻頭におくには、これ以上適した歌はなかったであろう。

後に保田与重郎が『後鳥羽院』の中で、「至尊調」とか「帝王ぶり」といって讃えたのはこの種の歌で、その伝統は代々の天皇によって、多かれ少かれうけつがれて行くが、それは万葉集にはじまるといっても過言ではないと思う。そして、その最後の四千五百十六

首目の歌は、雄略天皇から四世紀ほど後の、大伴家持の「宴の歌一首」をもって終る。

新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事

詞書に「三年春正月一日、因幡国の庁にして、饗を国郡の司等に賜ふ」とあり、前年の天平宝字二年（七五八）、因幡の国守に任命された家持は、都を遠くはなれた北国で新しい年を迎えた。その宴の場に降りしきる雪を眺めながら、間断なく積る白雪になぞらえて、吉事が永遠に重なって、絶えることがないように、と願ったのである。

表面は、めでたい歌詞をつらねただけのように見えるが、藤原氏の勢力に圧されて、次第に衰退しつつあった名族大伴氏の運命を想う時、家持がどのような気持でこの歌を作ったか、察してみずにはいられない。時はあたかも物みな新しく生れ変わる時節であり、そこに降りつむ清らかな雪を見て、はかない希望を抱いたのではなかったか。彼は血を吐くおもいで、わが一族の復活と繁栄を、万葉集二十巻のうちに籠めたに違いない。正月の歌を最後においたことも、再びめぐり来る春を祈願したためで、その希いはずいに私事を離れ

て、榮えあるやまと歌の伝統が、とこしえにつづくことの祈りへと転じて行ったように見える。

「新しき年の始の初春の……」と、同じ意味の詞をいくつも重ねて、雪の降るさまを形容し、流れるようによみ下した後、「いや重け吉事」の終句で、どっしりと言いおさめている。家持の作としては、それほどすぐれているとはいえないが、では何が万葉集の結びにふさわしいかといえば、やはりこの一首をおいてはない。もったも、万葉集が、最初から今の順序に並べられたかどうかは判らないが、もしそうでなかったとしても、そうなるべくしてなったといえるであらう。

万葉集には、序文も後記もないけれども、最初の雄略天皇の「おほみうた」と、最後の家持の「宴の歌」によって、その本質はあますところなく語られているように思う。家持の願いどおり、帝王ぶりの調べは、その後も長く伝わり、やまと歌のいのちは、絶えることなくつづいて行ったのである。

古今集は、それから約百五十年後の、十世紀初頭に生れた。醍醐天皇の延喜五年（九〇五）、紀貫之きのつらゆきはか三名の撰者に仰せて、はじめて成った勅撰和歌集である。紀貫之が仮名

序を書き、紀淑望^{きのよしもち}が漢文で真名序^{まな}を記した。

「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」

そのようにはじまる貫之の序文は、簡潔で美しく、やまと歌のよって来たところを説き明かしている。ことに、「花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、いきとしいけるもの、いづれか歌を詠まざりける」という詞は、日本人の自然観をよく現しており、もともと人間的な恋の歌さえ、何らかの形で花鳥風月にことよせて詠まなければおさまらなかったことを示している。

最初の「よろづの言の葉とぞなれりける」は、万葉集を念頭においていったのだろうが、それかあらぬか古今集も、はじめの頃は『続^{しよく}万葉集』と呼ばれていた。後に『古今和歌集』と改名されたのは、仮名序の終りに次の詞があるからだといわれている。

「……歌のさまを知り、ことの心を得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、古^{いにしへ}を仰^{あふ}ぎて今を恋ひざらめかも」

(以上に述べ来たったように)歌の在りかたをよく知り、物事の真意をわきまえた人々は、大空の月を見るように、この歌集が生れた「古^{いにしへ}」を尊び、延喜の御代の「今」をなつかしく思うに違いない。——そこから「古今和歌集」と名づけられたと伝えている。

ここに現れた貫之の自信は、だが一朝一夕ででき上ったものではなかった。貫之は、やまと歌の歴史を語るについて、万葉集以後は「いにしへのことをも、歌の心をも知れる人、わづかに一人二人なりき」といって、日本の歌の伝統が途絶えたことを嘆いている。

それは大伴家持が死んだ八世紀の終り頃、世の中が一変したからである。桓武天皇は、大和の旧勢力を一掃するために、都を奈良から京都へ移し、人心は大いに動揺したが、今そのことに一々触れているひまはない。何世紀にも亘って継承されて来たやまと歌も、早くいえばその犠牲となったのである。

旧弊を一新するために、朝廷は中国の文物を取入れることに集中し、唐風一辺倒の時代が半世紀以上もつづく。その間に、やまと歌が衰微したことを、貫之はこのように慨嘆する。

「今の世の中、色につき、人の心、花になりにけるより、あだなる歌、はかなき言の
みいでくれば、色好みの家に埋れ木の、人知れぬこととなりて、まめなる所には、花
薄ほに出だすべきことにもあらずなりにたり」

よろず人心がはでになったので、うわついた歌や、空虚な言葉ばかり使うようになって、

歌は色好みの人々の間に埋もれてしまい、真面目なことは、薄の穂にも現れないような、哀れな有様となり終った。つまりは、私事に関することのみで、公けの場に出せるような歌は見られなくなった、と嘆いたのである。

思えば日本の文化は、何度もそういう危機に直面し、その度毎に新しいいぶきを得て、蘇ったように思われる。もし、中国文化の波にさらされなかったならば、言葉はもちろんのこと、文字も発達しなかったに違いない。漢字から仮名を發明した人々は、天才的な仕事をなしとげたので、その萌芽は万葉集に見られるとはいえ、まだ不安定な時代がしばらくつづく。たとえば平安初期の人々がどんな風俗をしていたか、そんなことも正確にわかっていないのは、世の中が混乱していたことの証拠であり、言葉の問題と切離して考えるわけに行かない。そういう暗黒時代に、やまと歌のか細い糸は切れることなく、中国文化の蔭でひっそりとつむがれていたのである。

桓武天皇から、嵯峨、淳和と経る間に、中国の文物はいよいよ隆盛を極めたが、しょせん日本の風土になじめる筈はなかった。世の中が次第におちつくにしたがい、政治の上でも、文化の面でも、日本人は日本人自身の血に目覚める。その時期が熟したのが醍醐天皇の延喜年間で、今まで細々とやまと歌を守り通した人々にとって、最初の勅撰和歌集が編

まれたことは、どんなにか喜ばしく、かつ光榮に思われたことだろう。

紀貫之の自信と抱負は、そのようにして生れた。「色好みの家に埋れ木の、人知れぬこととなり」果てていた歌は、再び日の目を見ることとなったが、実は、そこにこそやまと歌の本質は見出せるのではなかったか。逆にいえば、色好みの人々が、男女間の秘めごとを語り合い、「あだなる歌、はかなき言」をいい交して、ひたすら私事に拘泥していたから残ったといえるのではなからうか。

古今和歌集二十巻のうち、恋歌は四分の一の五巻を占め、四季の歌、離別、哀傷、羈旅きりよの歌などにも、恋歌が数多く含まれているのをみると、実際にはその数倍にもものぼると思う。そうでなくても、恋愛は人生経験の師であり、ものの哀れを知ること、男女の愛にはじまることを思えば、色恋沙汰に終始した当時の不良少年こそ、やまと歌の恩人と呼ぶことができよう。その代表的な人物に、在原ありわらのなりひら業平がいた。

業平（八二五—八八〇）は、『三代実録』に、「体貌閑雅 放縦不_レ拘 略無_ニ才学_一 善作_ニ倭歌_一」（その風姿は閑雅であり、物事にこだわらない性格で、才学には欠けるところがあったが、やまと歌は上手であった）と伝えている。この場合の才学とは、中国の学問（漢か